



コウノトリ湿地ネットニュースレター



豊岡市城崎町今津1362  
0796-20-8560  
toshima8560@iris.eonet.ne.jp  
<http://wac-s.net>

No.  
26

1 1 1 1 1 1



## 目次

●大地にどっしり根差した活動を.....	1
●考えてみましょう！ 野生動物のこと、コウノトリのこと.....	3
●私が目指す農業.....	6
●韓国訪問記.....	7
●対馬に行ってきました.....	9
●ハチゴロウの戸島湿地便り・編集後記.....	10



### ■ 戸島湿地から



2014・11・07 寄り添う戸島ペア/2014・11・20 戸島ペア交尾/2014・11・06 J0391とJ0017 湿地内で遭遇



今年の秋もボランティア作業にたくさんの方々がいらっしゃいました。左上から、トヨタ部品共販(株)、(株)川嶋建設、京セラドキュメントソリューションズ(株)、兵庫県立尼崎小田高校、日本損害保険代理業協会兵庫県支部の皆様です。

※表紙の写真は2014年12月10日、百合地でトラクターの後をついて餌を探す J0228とJ0275  
撮影 湿地ネット会員

## 大地にどっしり根差した活動を

コウノリ湿地ネット 代表 佐竹節夫



あけましておめでとうございます。  
本年も、よろしくお願ひします。

今年は(も)、コウノリ野生復帰が大きく飛躍しそうな気配です。関東の千葉県野田市、北陸の福井県越前市、そして韓国のイエサン郡において、それぞれが飼育している個体を放鳥するための準備が進んでいるからです。実施されれば、一挙に三方から火の手が上がるわけで、コウノリの勢力図がダイナミックに変わっていくと思われまふ。

新時代の突入に際して、本舗(?)・豊岡はどうあるべきでしょう。

### ■ 広域展開と地盤固め

コウノリは、東アジアを舞台に東西南北を飛び交う大型の渡り鳥です。彼らにとっては、例え豊岡が良い環境だとしても生息域の単位では、アパートの一室でしかないでしょう。一室にいくつもの家族が住んでいるのですから、いびつな状況になるのは仕方ありません。実際、幼鳥たちは「窮屈で仕方ない」と、全国、韓国へ飛び出しています。今年も、継続ペアの繁殖に加え、新たなペア形成も期待できそうで、さらに個体数が増えることは間違いありません。そして、そのうちの何羽かは各地へ飛翔していくでしょう。3地域からの放鳥個体と出会うかもしれません。彼らが見つめる先は、東アジアです。

そうしてみると、最初に野生復帰を提起し、ようやくここまで到達してきた豊岡のこれからの使命は、必然的にコウノリという種の保存のため、生息(分布)域の拡大に向けていくこととなります。それに際しては、これまでに培ってきた自然・文化の再生や環境経済戦略等のノウハウが商品になるでしょう。まずは、今年放鳥される地域、豊岡の個体が舞い降りているさまざまな地域との連携・交流を深めることでしょうか。当会も、民間レベルでの新展開を模索していきたいと考えています。(道筋が見えだせば、その都度報告します)

では、発信元の豊岡の状況はというと、2~3年ほど前からコウノリの数が増えて市内のあちこちで姿を見るようになったことで、「野生復帰は成功した」とか「環境再生はもういいのではないか」との声が聞かれました。その後、80数羽を数えるに至って、ずいぶん危機感、緊迫感が下がってきたように思えます。あたかも「やはり経済だよ」と、官民による開発(中には昭和時代と思えるようなやり方)が目につきます。これから本格的に、というのに、道半ばで元に戻ってしまった。というよりも、コウノリ保護、自然・文化再生に取り組む側がちっとも本物になり得ていないことの証左なのでしょう。だとしたら、私たち住民が、本物になるための心身の鍛え直しが大切かもしれません。

ここに、1855年にアメリカインディアンのシアトル酋長がフランクリン・ピアース大統領に宛てた1通の手紙があります。少し長いですが、新年にあたり「出会いへの旅メニューインは語る」(みすず書房)から引用して掲載いたします。意識の見つめ直しの一助になればうれしいです。





白人の都市には、静かな場所がありません。秋の葉音や昆虫の羽音をきく場所がないので、たぶんわたしが野蛮人でわからないために、騒々しい話し声が耳を辱めるのでしょう。そしてもしも人間がヨタカの美しい鳴き声や、夜になると池の周囲でおこなわれるカエルの議論を聞くことができなければ、生活はどうなるのでしょうか？ インディアンは、池の水面をさっと吹いてゆく風のかすかな音や、真昼の雨に清められたり松のかおりを発散したりする、風そのものにおいのほうを好むのです。空気はインディアンにとって貴重なものですが、それはすべてのもの—動物と樹々と人間自身—が同じように呼吸しているからです。白人は、自分が呼吸している空気に気づいていないようです。死んで何日もたった人間のように、彼は自分の悪臭に無感覚なのです。

（白人が土地を買いたいと思っていることに）もしもわたしが受諾するならば、わたしはひとつ条件をつけます。つまり白人はこの土地の動物を、自分の兄弟とみなすべきである、ということです。わたしは野蛮人ですので、ほかのどんな方法もわかりません。わたしは大平原の上に多数の腐敗してゆく野牛を見たことがあります、それは白人が通過する列車から射殺して置き去りにしたものです。わたしは野蛮人ですので、われわれが生きるためだけに殺す野牛よりも、どうして煙を吐く機関車のほうが大切であるのかわかりません。動物がいなければ、人間はどうなるでしょうか？ もしもすべての動物がいなくなったとしたら、人間は魂の大きな孤独さのために死ぬことでしょう。なぜなら動物の身の上にかかることはなんであれ、人間の身にも起こることですから。ありとあらゆるものは結びついています。大地にふりかかることはなんであれ、大地の子にもふりかかるのです。（中略）

白人たちもまた—たぶんほかの種族よりも早く—死ぬ運命にあります。あなたのベッドを汚しつづけるならば、あなたはいつの夜かみずからの排泄物で窒息することでしょう。野牛がすべて惨殺され、野生の馬がすべて馴らされ、森の奥まった片隅が多くの男たちの大衆でみだされ、豊かに茂った丘の眺めがお喋りな女房たちによって汚点をつけられるとき、茂みはどこにあるでしょうか？ なくなっています。ワシはどこにいるでしょうか？ なくなっています。これは、生きることの終わり生き残ることの初めを示しているのです。

白人がなにを夢み、長い冬の夜にどんな希望を子供たちに語り、彼らが明日を望めるようにどんなビジョンを彼らの心に焼きつけるかを知っていれば、われわれにもわかるかもしれません。だがわれわれは野蛮人です。白人の夢は、われわれから隠されています。そしてそれが隠されているために、われわれはみずからの道をゆくでしょう。

もしもわれわれが自分の土地を売ることに同意するならば、あなたがわれわれに約束したインディアン保留地を確保することになるでしょう。たぶん、その地でわれわれは、短い日々を望むがままに生き抜くかもしれません。

最後のインディアンが大地から消え去ってしまい、彼の思い出が大平原を寄切ってゆく雲の影のようになるとき、これらの岸边と森林はわたしの部族の魂をなおも保持しているでしょう。なぜならわれわれは、生まれたばかりの幼児が母親の胸の鼓動を愛するように、大地を愛しているからです。



考えてみましょう！ 野生動物のこと、コウノトリのこと

NPO 法人野生動物救護獣医師協会

日本獣医生命科学大学／帝京科学大学 箕輪 多津男



近年、野外で暮らすコウノトリの数が増えるに伴って、傷病個体も目に付くようになってきました。私たちは、同じ里に住む者としてどう関わりたいのか？ 2014年11月3日、箕輪多津男氏をお招きし、考え方を学びました。以下は、ハチゴロウの戸島湿地での講演要旨を事務局がまとめたものです。

### ■ 野生動物に対する意識の変遷

我が国においては、古来より人々は自然や動植物に親しみながら日常生活を送ってきました。そのことは、様々な古典を繙いても明らかです。江戸時代までは鳥獣の生息数も今とは比べものにならない程多かったので、人々は野生動物を意識するまでもなく、身近で、ごく当たり前の存在として受けとめていました。

幕末から明治維新にかけて西洋から様々な工学技術等が入り込むようになり、我が国にも産業革命の波が沸き起こってきます。大規模な国土の開発も始まっていきました。一方で、明治期はか



つてない程鳥獣の狩猟が盛んになり、剥製の量産等の流れもあって、各種の野生動物が急激に数を減らしていきます。当時、野生動物等は人々の利用の対象とされていたのです。

明治、大正、昭和と時が経過するにつれ、急速に失われていく野生動物の姿に人々の目が徐々に向くようになり、その中から野生動物保護の潮流が生まれていきます。海外における先進的な取り組みが、次々と我が国に紹介されたことも大きな要因でした。しかし、野生動物保護運動が本格化するのには、戦後しばらく経ってからのことでした。

戦前や戦後しばらくの間は、野生動物保護などと言うと、人々から軽蔑の眼差しで見られることもしばしばでした。

「人間がこの世で一番偉いのであって、動物などたいしたものじゃない」「動物は我々の食べ物になったり、毛皮を採ったりするためにあるんだ」「我々に何の役にも立たないものを何で守らねばならんのか」—こうした声がよく聞かれたものでした。

このような中で、孤独な中にも志を高く持ち、保護活動の礎を築いた人々がいました。例えば、日本と中国のトキの保護活動に生涯を捧げてきた村本義雄氏などがそうです。現在の保護活動の姿は、こうした先達の地道な活動の上に成立してきたことを忘れてはならないと思います。

### ■ 野生動物に関する認識

では、改めて「野生動物」とは何でしょう？

まずは、あたり前ですが「野生生物の一員」ということになりますね。そして、「他のあらゆる生物(種)と共に生態系を築いている掛替えのない存在」とも言えるでしょう。野生動物は、私たち人間の所有物だったり勝手に支配すべき存在ではありません。人間と野生動物は対等(横並び)の関係だという感覚を持つことが大事だと思います。大阪府高槻市にある JT 生命誌研究館には、生物(生命)の歩

んできた道を模試化した図が掲げられていますが、見事に「現存する生物はすべて同じ起源を持つ対等の存在である」ことを示しています。

つまり、身近にいる大小さまざまな野生動物の存在を、種の違いこそあれ、知人や隣人に対する時と同じような畏敬と尊重の感覚で受け止めることができるかどうか、野生動物との共存を考える上での出発点ということになるわけです。



一方で、生態系における野生動物の活動や営みについては、特別な事情がない限り、できるだけ介入しないように心掛け、適度な距離感を保つことも必要です。

大切なことは、人は動物種によってそれぞれ好みがあるものの、野生動物との共存や生物多様性の保全等を考える時には、(一定の事情がない限り)種の違いによって、軽重の別を計ってはならないということです。

もし、巣箱で営巣しているシジュウカラをアオダイショウが襲おうとしたら、皆さんならどうしますか？この場合は野生動物どうしの営みなので、人間は手を出さずに静観できるかどうかが問われることになると思います。

## ■ 野生動物の救護について

野生動物救護に関しては、基本的には次のように考えています。

野外等で何らかの異変が見られる野生動物の姿を見かけたとしても、そこに人為的な要素が一切働いていない場合、つまり、生態系の営みにおけるごく自然な成り生きによってそうした状態になってしまった場合には、手を触れず、そのままにしておくという態度は妥当なものと考えています。

一方で、人為的な要因によって野生動物に何らかの障害等がもたらされた場合には、その責任上からも、直ちに救護を行う必要が生じてくると考えます。ただし、その場合は「助けたい」という気持ち(善意)が大切ですので、他人に強要するものではないでしょう。

通常は、対象となる野生動物の異変が人為的要因によるものかどうかは、その場面に偶然立ち会うことがなければ、ほとんど判断がつかないものです。そういう場合どうするかというと、私たちは一般的に見て何らかの人為的要因が働いているものと推定して、その都度、適切な処置を図っていくという判断をしています。

## ■ コウノトリ野生復帰の取り組みでは

現在、豊岡で進められているコウノトリの取り組みは、基本的には人の手によって育てられた(人工飼育)個体を野生の状態へと移行させる試みです。ですから、そもそも野生状態を出発点とした取り組みではありません。

飼育下から放鳥されて完全に野生化するまでには、人と個体との関係にも変化が生じてきます。距離感の持ち方と言ってもいいでしょう。飼育下では個体に人間が全面的に介入しますので、人と個体は一体的と言えます。放鳥され、個体が世代交代するにつれ、完全な野生化が達成された時には、人と個体はそれぞれ独立の関係となりますから、人の介入は禁止しなくてはなりません。もちろん、その過程では様々な対策と軌道修正が必要ですが・・・。

では、現在の状況は、どの段階にあるのかを見極める必要があります。既に放鳥されたコウノトリは、

四国や九州地方、さらには韓国にまで到達したような個体も存在する一方で、地元に残り続けている個体も少なくありません。私は、こうした状況から、今は野生化途上の段階だと考えています。ですから、まだ給餌、回収などを繰り返し、一定のケアを行いながら、さらなる世代交代なども重ねつつ、最終ゴールを目指すものと考えています。

その過程で、何らかの人為的な要因により傷害等をもたらされた場合には、元々野生状態の動物であってもそうなので、人間側の責任上の問題もあり、できる限り救護を行う必要が生じてくるものと考えています。したがって、コウノトリが電線やシカ防止ネットなどによって傷ついた状態で発見された場合には、救護することが望まれます。

一方で、野生動物管理等の視点から、一度放鳥した個体はすべて「野生個体」とみなし、どのようなことがあってもその生活や行動に介入しないようにする、という意見もあることは承知しています。また、1羽や2羽の傷病鳥獣を救っても、そもそも生態系の保全や生物多様性の維持にとって何の意味もないという考えの方もおられますし、救護活動という人為的な行為そのものが、自然環境に生息する個体に異常な状態をもたらし、ひいては生態系に対しても負の影響を及ぼすという研究者もおられます…。

### ■ 最前線の臨床の現場では

様々な意見や考え方がある中で、私たち野生動物救護獣医師協会の考え方は次のとおりです。

1つ目は、子供たちや善意の人々が、例えば泣きながら救いを求めて連れてきた小さな命を、見捨てることなど到底できないというものです。野生動物救護の現場は、子供たちや一般の方々が命の大切さを学ぶ機会でもあるのです。



20141023 死亡直前の J0090

2つ目は傷病鳥獣の個体の身になって考えたら「何とかせねば」という気持ちになるということです。原因を作っているのは我々人間なのだから、その責任上、救護を行うことが筋だと考えるわけです。

3つ目は、傷病鳥獣を生む原因となっている背景としての環境についても、考えていく必要があるということです。野生動物は人の使う言葉によって訴えることができないので、人間が代弁者として意をくみ取っていく役割があると思うのです。

### ■ 「相手は生物である」～余裕のある対応を～

野生動物の救護に関しては、しばしば意見の対立が起きるのですが、本当は対立の関係にはならないはずです。現場では動物に襲われそうになった人は真っ先に救わねばならないし、農業被害の軽減や、一定レベルの望ましい生態系を守る必要がある場合には、有害鳥獣駆除も必要となるでしょう。外来生物の駆除もまた然りです。救護活動と有害鳥獣の駆除等は、ある程度バランスを見ながら、どこかで折り合いをつけ、関係者同士が互いに協力関係を築きながら、具体的な対応策を講じていく事柄だと思っています。単純に黒か白かを決着させることではないでしょう。

相手(野生動物)は私たち人間と同じ「対等な生物」であるので、「こちらの思い通りにいかないことの方が多くて当たり前」という覚悟と余裕を持って、日頃からそれぞれの立場で、地道な活動に取り組んでいただければと思います。その際、コウノトリを始め「その動物(種)が好き」という気持ちを持つことが、何より大切になってくるに違いありません。一方では科学的な根拠も重要ですが、活動の原動力となるのは、最後はそのあたりの感情ということになるのではないのでしょうか。





## 私が目指す農業

森津こうのとりファーム 代表 成田 市雄



平成17年、いよいよ秋にはコウノトリが放鳥される年を迎えた。

私の方は、有機の苗作りが未だ整理できていない状態での初めての無農薬栽培の取り組みとなる。抑草には田んぼの均平が大事だと考え、田植え前に暇さえあれば無農薬栽培予定田にトラクターをいれる。田植えをしたが思うような成長が見られない。トラクターの入れ過ぎによる酸欠？ 苗に力がない？ 地力不足？ なんだろう？ 見当がつかない。でも草も生えていない。成功か？ でも何かが違うような・・・

7月、仲間といっしょに富山に研修に向かった。農機具メーカーのタイワ精機にお邪魔した。有機水田や工場見学をしてお昼を高井会長さんといっしょにした。出てきたご飯は赤飯のような色をしていて小豆でもない黒い小さいものが入っている。食べてみると、赤飯ではなく黒豆ご飯のような感じだった。

高井会長さんが話しを始められた。「実は私は今年の4月に病院から前立腺ガンで1年の余命宣告を受けました。その日から皆さんが今、食べられている食事を続け翌年、病院に行ったところガンが消えていました。」と言われた。“ほんとに？”と驚いた。以前の私は、美味しいお米をつくり消費者に喜んでもらうことが一番だと考えていた。しかし、それだけでは駄目なんだと改めて考えるようになっていった。本物の食べものを作れば医者に見放された人を助けられる。なんて素晴らしい仕事なんだと心が弾んだ。いつかは全ての圃場で有機栽培がしたいと思うようになった。しかし、難しいだろうな。もっと、勉強しなきゃ・・・。



9月になり、初めての有機水田も実りの秋を迎えた。草もほとんどない。除草剤をふってもここまでにはならないと思った。しかし、収量はあまり期待できそうもない。平年作ぐらいかなと思った。

いよいよコウノトリ自然放鳥。放鳥に合わせ農家の実証をもとに兵庫県から“コウノトリ育む農法”（以下、育む農法）として日本や世界に向け発信された。たくさんの方が集まっている。放鳥されると歓声があがる。私は大歓声の中、なぜか喜べなかった。今、飛んでいるコウノトリ、豊岡で無事、過ごせられるのか？ 未だ豊岡版有機栽培が確立できない状態ではたして・・・、野に放たれたコウノトリが田んぼで息絶えれば全国各地の農家に笑われる。肩に重圧がのしかかるような思いがした。新たな出発がいよいよ始まると思っていた。



翌、平成18年4月には広く仲間を増やすため兵庫県や豊岡市の支援を受け、JAたじまが事務局を受け持ち、コウノトリ育むお米生産部会が設立された。

この年、育む農法を実践する農家は地元森津では2人だけであった。収穫も終わった秋、小学5年生の女の子から、“オッチャンがいくら無農薬でお米を作っても隣で農薬を振ってたら、そんな無農薬じゃない”と言われた。非常にこたえた。自分が有機農家になる前に、まず、地元森津の水田を有機にしようと思った。翌、平成19年には“森津農地・水・環境保全協議会”を立ち上げ、会議の折にふれ、育む農法の大切さや何故、今必要なのかを話した。

平成20年には、兵庫県から補助を受け、育む農法を実践する農家9人で“森津こうのとりファーム”を立ち上げた。年々、面積も拡大し平成22年には集落の54%の10haの水田が有機水田となった。この年から田園風景が変わってきた。排水路や水田、農道などに多くの生き物が見られるようになってきた。トラクターを田んぼにいれるとツバメが何百羽と飛んでくる。6月に子供たちと生き物調査と称



して水路を網で掬えばフナの稚魚がたくさん取れる。農道脇や水田にはカエル、ヘビ、クモ、秋にはイナゴを食べにコウノトリが飛来する。刈取りが終わると待っていたかのように赤トンボがとんでくる。子供の頃の風景が蘇ったような気がした。6月の森津の田んぼ。有機水田は濁っていて農薬を入れた田んぼは澄み切っている。圃場を歩いて回ると、見るだけで農薬を入れたか入れてないかが分かってしまうという田園風景が出来上がった。非常に嬉しかった。苦労した甲斐があったと感じた。しかし、この年をピークに年々、有機に取り組む農家は減少し現在では合鴨農法を含めて5人になってしまった。面積も7ha程度までになってしまった。



自分の不甲斐なさを感じている。反面、“何故、私のマネをしてくれないんだろう”とってしまうこともある。

昨年、平成26年度からは、有機水田拡大に向けて地元森津に限らず豊岡の生産者全体に有機栽培を推奨するため体験談をもとに技術指導を行ってきた。前年に比べ面積も拡大され協力してくれた皆さんに感謝したいと思っている。今年さらには有機栽培面積の拡大に向け努力したいと思っている。“あなたの夢は”と聞かれたら“豊岡の水田を全て有機にすること”と話してきた。でもそれにはまず自分自身が全てを有機栽培にする「有機農家」にならなければならないと思っている。

勉強を始めて13年、地域の農業も風景も考え方も随分変わってきた。自分自身が一番、変わったと感じている。これからも目の前の生活の豊かさを求めるためよりも、次世代の幸せを願って勉強や研鑽を続けていきたいと考えている。育む農法を実践する仲間にも人や自然を愛し、勇気(有機)と誇りを持って続けていってほしいと願っている。そのためにも、これからも多くの皆さんのご支援をいただきたいと思っている。



## 韓国訪問記

コウノトリ湿地ネット会員 宮村良雄



### ■ 3月20日衝撃のニュース

朝「読売新聞朝刊」を開くと、2014年3月18日韓国金海市で2012年出石町伊豆巣塔で巣立ちしたJ0051が目撃されたニュースが載っているではないか。いつの日かコウノトリが国境を越えるとは思っていたが、こんなに早くその日がやって来るとは思っていなかった。衝撃であった。コウノトリの計り知れない潜在能力に脱帽した出来事だった。インターネットでJ0051のニュースを追いかけているとJ0051と幼鳥1羽と一緒にいることが分かった。そうこうしていると幼鳥はさらに1羽増え、更に半年前に韓国のコウノトリ飼育施設



から脱走したB49が半年ぶりに一緒に確認されたとのニュースを見つけることができた。

### ■ 韓国のコウノトリを見に行きませんか

10月中旬「J0051がいる間に韓国に行きませ

んか」と豊岡市役所コウノトリ共生課宮垣さんから声をかけられ、もちろん二つ返事で了解した。

11月19日関西空港から金海空港に渡って、最初にJ0051が目撃された金海市にある花浦川湿地とその周辺の田んぼを案内してもらった。韓国を移動する車窓の風景は、豊岡市とそんなに変わりなく、紅葉の季節であった。それでもなんとなく違和感を感じる場所があった。花浦川湿地について田んぼを見たとき豊岡市との違いがはっきりした。豊岡の田んぼは稲刈り後も二番穂が伸びるだけでなく、稲株の間はたくさんの雑草で緑色で、土も湿って黒っぽいのである。そしてコウノトリが秋の終わりから冬になっても田んぼの周辺で採餌を繰り返している光景が、当たり前になっている。豊岡では、コウノトリは昔「田んぼのツル」と呼ばれていた。四季を通して田んぼを主な生活の場としていた。

韓国の田んぼは、緑色は少なく乾燥した稲藁と白く乾いた土であった。山も緑が少なく、なんとなく、コウノトリが越冬するには厳しい環境だなと感じた。しかし、春から秋にかけて花浦川湿地を含めた田んぼがコウノトリの餌場であったことは、容易に理解できた。

20日(二日目)は、宿泊先の昌原市から西に80キロ離れたJ0051を含めた4羽がいる河東郡の干拓地を目指した。地元の研究者が前日を含め早朝から探して下さっていたが、残念ながらJ0051は発見できず、大陸生まれの幼鳥を1羽目撃できただけであった。コウノトリの目撃できた場所は、干拓地の仕切り堤防内側のいわゆる調整池といわれる湿地であった。干拓地の田んぼは、金海市でみた田んぼと同様に乾燥し、コウノトリの餌になる生き物の姿を見つけることができなかった。湿地や水路ではメダカやフナ(鯉?)のような魚を見ることができた。仕切り堤防の外は干満差がかなり大きく、干潮時には広い干潟が出現する。J0051を含めた4羽が現在いる意味が納得できたような気がした。

続いていくつかのコウノトリ飛来地などを案内していただいた。いずれも干拓地端の調整池と干潟であった。



21日(三日目)は、ホテルのある昌原市で「慶尚南道ラムサール環境財団」主催の「国際絶滅危惧種のコウノトリ保全のための韓日ネットワークフォーラム」に参加した。

### ■ 韓国から豊岡とコウノトリを見る

実質3日間の韓国であったが、コウノトリのことでいくつかのことが確認できた。

一つ目は、コウノトリが持っている不思議な力だ。国境を越えたコウノトリが、大陸の幼鳥2羽と韓国内の飼育施設から脱走後、半年も行方が分からなかったJ49と出会い、一緒に目撃される偶然。4羽がいる河東郡の干拓地が、コウノトリが基本的に好み集まる場所である、と言ってしまえばそれまでである。しかし、同じような環境は他にもあり、4羽が別々の場所で目撃されることの方がわかりやすい。北から来たコウノトリ・南から来たコウノトリ・韓国生まれのコウノトリが出会ったことが偶然ではなく、コウノトリが人間に環境の大切さを教えるために結集したと考えるのは度を越えた妄想とは思えないのである。

韓国のコウノトリも細かい経緯の違いはあっても日本と同じような時期に絶滅した。そして韓国のひとつひとつはコウノトリを野生復帰させたいと願い、

現在プロジェクトが進行中である。その思いは、豊岡市民から見ればとても激しく、行動的である。韓国の人々は豊岡に対して、豊岡市民が考えている以上に、コウノリの野生復帰においての中心的役割を期待しているのである。

コウノリを取り巻く人々は、アツク、親切である。韓国での4日間、早朝から夜遅くまで、現地の案内から食事まで付き合ってくださいました韓国の皆さん。外からの訪問者に対し豊岡市民はどのようなおもてなしをし、何を伝えなければならないのか、改めて考える機会を与えて貰った。

### ■ あとがき

J0051 が最初に目撃された場所は、韓国の 3

世紀から6世紀中頃にかけて朝鮮半島の中南部において、伽耶(かや)と呼ばれていた。J0051 が巣立った豊岡市出石町伊豆は、伽耶から移り住んで古里の名前を残した豊岡市加陽(かや)の隣の地区である。

J0051 には、厳しい冬を乗り越えて春、一度豊岡に帰って来てほしい。豊岡のコウノリに持っている位置情報も含めた韓国情報を伝えた後に、もう一度複数で韓国に渡ってほしいものである。ここまで様々な偶然が重なれば、その偶然を力に変えることは「コウノリ悠然と舞う豊岡市」の使命ではないだろうかと考えた韓国訪問であった。



### 対馬に行ってきました コウノリ湿地ネット会員 宮村さち子



2014年3月18日、豊岡生まれのコウノリJ0051が韓国慶尚南道の金海市にて確認されました。豊岡のコウノリが海を越えて、お隣の国へ行ったのです。人間も後れをとっているわけにはいきません。さあ、がんばらなくては。



同年11月30日に対馬を訪れました。対馬は九州本土からは140km弱、そして朝鮮半島からは約50kmと、日本と大陸を結ぶ海上にあります。コウノリたちが大陸に渡るときの中継地として、また留鳥となって繁殖してくれるかも、と期待したい場所です。実際、昨年末には豊岡生まれの4羽のコウノリの飛来が確認されています。

対馬は全体の89パーセントが山と耕作地が少ないのですが、その中でも広い田んぼを抱える上県町佐護から峰町吉田で目撃されています。今回は佐護地区を訪れました。

佐護地区では「佐護ツシマヤマネコ米」がつくられていて、ヤマネコの餌生物が増える様な生き物配慮の取り組みが行われています。豊岡の「コウノリ育む農法」と同じ発想だと感じました。



佐護の田んぼはコウノリが羽根を休めるには十分な広さがあると感じられました。





対馬では天然記念物のツシマヤマネコの保護活動が進められています。年々数が減り絶滅の危機にあるのは、以前のコウノトリのケースと同じです。どうか危機を乗り越えられますように。

対馬の中央を縦に走る国道 382 号線に沿って移動しました。土地のほとんどが山であり、周りを海に囲まれていることが実感できるドライブでした。海の向こうに、韓国の島影が垣間見えました。国境の島であることも充分実感できました。



2013年12月26日  
対馬に飛来したコウノトリ4羽  
写真提供 日本大学糸永研究室

最北部に位置する上対馬町は、韓国まで約 50km の至近距離にあり、天気の良い日には韓国釜山市の街並が望めるそうです。



### ハチゴロウの戸島湿地便り (11~12月編)

戸島湿地管理棟 森 薫



#### ■ 戸島ペアと子どもたちの近況

戸島ペアは 例年のように10月12日に巣に帰ってくると、初交尾行動をして(11月7日、20日も確認)、仲睦まじくしています。

でも、J0391♂はJ0294♀が不在のとき(11月6日)にJ0017♀が淡水湿地に降るのを許し、追い払わないことがありました。

J0017は淡水域に佇むJ0391の前を堂々と通りましたが、J0391は見えて見ぬふり……。なんだかJ0294が気の毒に思えました。本来なら、縄張り行動で追い払うものと思いついていたのと違う行動に、コウノリの個体別の個性なのかと疑問がわいてきました。J0017♀は、12月10日に赤石地区でJ0426♂(一度ペアを組んだ雄)と2羽でいるところを当会のメンバーが確認しているので、彼とペアになってくれればと期待しているところです。



J0294は13歳、J0391は10歳で、今年も繁殖すれば8年目となります。巣立ったヒナ15羽のうち(12月20日現在)10羽はこの3か月以内に確認され元気になっています。その中でもJ0009♀とJ0013♂の姉弟は仲が良く、豊岡では遺伝的管理のため繁殖できないように手立てをされているためか、赤穂～倉敷～西予と移動し、豊岡に戻ってはまた赤穂へと移動を繰り返しています。南さつま市に定着していたJ0022♀は単独で南さつま市と豊岡を行き来し、J0014♀、J0047♀、J0097♂は出石方面で、J0023♀、J0096♂は市内の一日市・福田地区で元気な様子が当会の目撃情報へ寄せられています。

J0007♂とJ0008♂は残念ながら事故のため死んでしまいました。J0082♂は、巣立後8月に徳島まで飛んで行っていたが、豊岡に戻ってからは(2013年9月21日)安否がわかりません。

足環のない戸島Bは識別がつきませんがJ0029♀と網野町で確認されている個体が戸島Bのかな?と想像しています。

J0029は、11月17日に網野町で右羽を痛めて飛べなくなったところを京丹後市で保護され、福知山動物園で緊急手術していただき一命をとりとめることができました。市民からの通報と地元でコウノトリを守っていきこうという熱い思いが行政(京丹後市長)に伝わり、京丹後市と京都府の連携、福知山動物園の野生動物保護センターとしての速やかな対応により保護されています。滋養のつく餌をと、ドジョウを捕まえて福知山動物園へ届けられている方の思い、あたたかく迎えてくださった福知山動物園、みんな、コウノトリへの愛情がいっぱいです。現在は、京丹後市がJ0029の受け入れ先を探されているとのこと。なお、豊岡市以外で保護され治療されたコウノトリはJ0029が初の事例です。

これからコウノトリが増えるに従い、遠く離れた地域でも負傷したコウノトリが見つかることがあると思います。そんなとき、負傷したコウノトリを見つけた人は、どこに連絡して、誰に託すといいのでしょうか。これまで市外の多くの方とお話したなかでは、皆さんの拠り所は、コウノトリの郷公園と豊岡市です。99パーセントの方が「足環の付けられたコウノトリ」又は「豊岡のコウノトリ」と言われています。でも、その豊岡では「コウノトリは文化財だから、飛来先の自治体の判断で・・・」と、飛来先任せになっているように思います。この二つの機関が連携して、例えば『コウノトリ相談室』『コウノトリレンジャー』など、傷ついた鳥への手だてをする機関ができないものでしょうか。現状からすると、環境のシンボルとして飛ばした責任が、飛来先の人々から問われているような気がしてなりません。当会も、豊岡で生まれた市民団体として担えることがあるはず・・・と、自問自答しているところです。

新しい年の初めに『コウノトリのまち豊岡』で、『コウノトリのおかげで(こんなことができた。こんな人に会えた)・・・』と、指折り数え、元気をだして、出来ることから始めていきたいと思っています。

## ■ たくさんの方がボランティア作業に来てくださいました

毎年秋には、たくさんの方がボランティア作業に来てくださいます。昨秋初めて、コウノトリの飛来

先・和歌山県庁より青年女性評議会の皆様が社会貢献作業の場として、戸島湿地を選んでいただき作業をしてくださいました。2012年から和歌山市に飛来している J0057 の様子をお話し、早朝からねぐら入りまで観察をされている方のお話など、関心をもって聞いてくださいました。続いて、城崎小学校3年生の皆さんが淡水域の草刈り、トヨタ部品共販株式会社の皆さん、株式会社川嶋建設、京セラドキュメントソリューションズ株式会社、兵庫県立尼崎小田高校、日本損害保険代理業協会兵庫県支部など総勢193名の皆さんが作業にきてくださいました。湿地は解放水面が広がり見違えるほどになり、作業の後には、コウノトリが一日中湿地で餌を食べていました。繁茂していたモウソウチクは土壤改良の役目を果たすべくチップ化して土に還しました。



皆さんが湿地でボランティア作業をされる姿に接して感じることは、作業が『気付かれる機会』となっていることです。たとえば、友人・職場の仲間の普段では見られない頑張る姿や、人を労う気持ち、自分自身の思いがけない力など、日常生活では見逃していることに気付かれているように感じます。私も、ささやかな気付きを大切に、今年も励んでいきたいと思っています。



#### コウノトリ湿地ネット賛助会員名簿(新規入会)



横浜市 竹内 勲

(2014年11月1日～12月24日)

ありがとうございました。これからもよろしくお願いたします。



#### 編集後記



京丹後市の野村重嘉さんは、無農薬での米作りを後継者につなぎたいと日々励んでおられます。年少の頃から牛を飼い、生きものを身近に暮らしてこられました。負傷した J0029 の元へ、ご自分の田んぼにいるドジョウを捕まえて届けられています。「かわいさあげに・・・」(かわいそうに)の言葉が、私の胸を打ち続けています。(森)

我が家では2匹の猫を飼っています。普段はそんなに仲が良くないのですが、冬になると休戦協定を結ぶのかひつつきあって寝ています。(宮村)

.....

